

# [事例調査報告] 会話英作文の授業内容としての 妥当性と学生の受容度について

新堀 孝

## 0. 調査の目的と方法

近年、英語運用能力の向上が社会から求められている現状がある一方で、大学の英語の授業の環境は必ずしも、この社会からの要請に応え得る授業を行える環境が十分に整っていないこともあるのが現状である。特に問題になるのはクラス・サイズである。ある大学では1クラス26～28名程度であったり、ある大学では1クラス41～45名だったり様々であるが、後者の規模のクラスでは、学生からの希望の強い「英会話を中心とした授業」を行うことは容易ではない。このクラス・サイズで英会話を中心とした授業を行うには、学生をグループやペアに分けて課題を与え、そのグループやペアごとに課題を解決し、会話練習をして表現の習得をしてもらうようにしなければいけない。この場合、学生にかなり高い動機と自分やパートナーの英語の間違いにある程度気づけるだけの最低限の英文法の知識があることが条件になる。数年前までは、これが可能であった。しかし、現在では所謂中堅校と呼ばれる大学の学生の英語のレベルでは、この方法による授業は無理になってきている。

そのような現状を踏まえ、昨年（平成16年）度に、初めての試みとして会話英作文を授業で扱った。確認であるが、会話英作文とは、対話形式になった口語体の和文を英訳する形式の英作文のことである。この調査では、会話英作文が英語の授業内容としてどの程度妥当なものであるか、また学生はどの程度妥当なものとして受け入れるのかを調べた。対象は東洋大学文学部（英米文学科及び英語コミュニケーション学科を除く）の1年生。（ただし、

東洋大学には再履修者用の授業がないため、受講者には再履修者も含む。) クラス・サイズは履修登録者数で言うと1クラスが41名、もう1クラスが45名であった。英語力(資格試験での得点力)向上という意味での妥当性を測るために、前期第1回目の授業と後期最終回の授業で同一問題の英語の試験を実施した。<sup>\*1</sup> また、学生の感覚的な英語力の向上感と会話英作文の受容度を測るために、後期第1回目と後期最終回の授業でアンケート調査を行った。<sup>\*2</sup> アンケートは各問、1そうは思わない、2どちらかといえば思わない、3どちらとも言えない、4どちらかといえば思う、5そう思う、の5つの選択肢から自分の思いに該当するものを選んでもらう形式をとった。第1回英語試験の受験者数は73名、第2回英語試験の受験者数は69名、第1回アンケート回答者数は68名、第2回アンケート回答者数は69名だった。第1回アンケートは後期の授業改善を目的として行ったものである。第2回アンケートは会話英作文を授業で扱うことを学生がどのように感じているのかを知るために行ったものである。本来の目的が異なるため、2回のアンケートの質問事項は、学生の姿勢の変化を見るために繰り返し同一事項を尋ねたものを除けば異なるものである。その点を予めここでお断りしておきたい。

なお、この調査は英語を主専攻としない文学部の学生を対象としており、英語を主専攻とする学生や他学部の学生に、この調査結果が必ずしも当てはまるとは限らないし、大学が異なれば異なる結果が出て来ることが容易に予想されることを、予めお断りしておきたい。その意味でも、これは、あくまでも1つの事例調査報告なのである。

## 1. 授業の内容及び方法

授業の内容については、前期はテキストの章だてに従って、“Asking for Repetition or Explanation”, “Natural Responses”, “Thanks and Apologies”, “Greetings and Farewells”の章を、後期は“Meeting People on the Campus”と第1回アンケートで学生のリクエストが多かった“Overseas Travel 1”, “Overseas Travel 2”, “Giving Directions”の章を扱った。授業方法としては、当初は基本問題(短い和文英訳)は口頭で学生に解答してもらったのだが、学生の声が教室全体に響きにくく、解答が聞こえづらいこと、当初の予想以上に添削を

[事例調査報告] 会話英作文の授業内容としての妥当性と学生の受容度について

必要とすることが多かったことから、全ての解答を学生に板書してもらう方法に切り換えた。添削後、様々な解説（多少の文化的な相違、体験談などの雑談を含む）、単語の発音練習、英文のリピーティング、多少の応用問題の解答の順で進め、毎時間の始めに前回の範囲の復習小テストを筆記試験で行った。期末試験は前期、後期ともに口頭試験とした。第1回アンケートで、「毎時間行っている小テストは英文を覚える助けになっていますか」という問いに対して3.99、「学期末試験を口頭試験にしてよかったですか」という問いに対して3.79という回答を得ている。口頭試験については、「授業で習っても、使えないと意味がないから」、「口頭で覚えると記憶に残りやすい」などの積極的な肯定意見と「口頭試験だとスペリングを覚えなくてすむ」という消極的肯定意見、「緊張して頭が真っ白になると答えられない」、「スペリングが書けなくなる」という否定的意見が自由記述欄にあった。

## 2. 学生の授業に臨む姿勢

まず、学生がどのような姿勢で授業に臨み、何を授業内容として望んでいるのかをアンケート結果から明らかにしたい。

質問事項	第1回アンケート	第2回アンケート
教師が説明をして学生がノートをとる授業形式の方が楽で良いと思いますか。	3.41	3.30
ペアやグループで会話の練習をする形式があった方が良いと思いますか。	2.48	2.19
クラスメイトの前(中)で、一人で英文を読まされたり英語の質問に答えるのは恥ずかしいと思いますか。	3.67	3.56
英語を話す(または英語で答える)ことを求められた時、間違いを指摘されるのが怖いと感じますか。	3.43	3.39
クラス・サイズを考慮しても Speaking Practice*3をやった方が良いと思いますか。	2.01	不問
クラス・サイズを考慮しても英会話(多少のリスニングを含む)中心の授業が良かったと思いますか。	不問	2.49
クラス・サイズを考慮してもリスニング(多少の英会話を含む)の授業が良かったと思いますか。	不問	2.54
クラス・サイズを考えなければ、英会話(多少のリスニングを含む)中心の授業が良かったと思いますか。	不問	3.10
クラス・サイズを考えなければ、リスニング(多少の英会話を含む)中心の授業が良かったと思いますか。	不問	3.07

アンケート結果から、実は学生は授業担当者が想像するほど英会話やリスニングの授業を求めているのではないのであり、かなり受け身な姿勢が見て取れる。これは、英語を読んだり英語で答えたりすることを恥ずかしいと感じたり、間違いを指摘されることを怖いと感じていることと関係があるのだろうが、基本的には楽な授業を希望しているということはわかる。「恥ずかしい」とか「怖い」と感じることは、「学生は間違えるのが当たり前だ、間違えないだけの英語力があれば、この場にいる必要はない」と1年間言い続けたのだが、ほとんど改善されなかった。「先生が学生は間違えるのは当たり前だというから」というコメントをつけて、「恥ずかしいと思いますか」、「怖いと感じますか」という問に対して、「1そうは思わない」と回答した学生もいたが、ほんの数名に過ぎなかった。

### 3. 授業方法と会話英作文に対する学生の受けとめ方

まず、実際に行った授業の方法や会話英作文に対する学生の受け止め方を、アンケート結果から確認したい。

質問事項	第1回アンケート	第2回アンケート
会話作文の解答にはいる前に、もっと体系的な文法の復習が必要ですか。	3.09	2.43
普通の英作文(和文英訳)の方が会話英作文よりも英語力向上に役立つと思いますか。	2.30	不問
普通の英作文の方が会話英作文よりも文法的なポイントがはっきりしていて勉強しやすいと思いますか。	2.97	不問
授業時間内にもっと発音練習をした方が良いですか。	3.21	2.80
授業時間内にもっとrepeating(文を繰り返し読む練習)をした方が良いですか。	3.09	不問
授業時間内にもっと英文を覚える時間をとった方が良いですか。	2.87	不問
会話英作文の解答を作る時に困ることは何ですか。1. 日本語は主語がはっきりしない	2.79	不問
2. くだけた表現(口語体)にあり見出し語が和英辞典で見つけにくい	4.38	不問
3. 文法的なポイントがわかりづらい	3.57	不問
会話英作文(授業で行っている英作文)は、皆さんの英語力向上に役立っていると思いますか。	3.71	3.87
会話英作文は適切な授業内容だったと思いますか。	不問	3.78

## [事例調査報告] 会話英作文の授業内容としての妥当性と学生の受容度について

授業方法としては、前期は僅かではあるが、解答に入る前の体系的な文法の復習が不足していたこと、授業時間内での発音練習及びrepeatingの練習が不足していたこと、和英辞典の使い方の指導が不足していたことがわかる。これを踏まえ、後期は、体系的な文法の復習を意識的に増やし、発音練習、repeating練習を増やし、次回の授業でわかりづらいと思われる日本語の和文和訳（別表現の紹介）を行うことにした。

会話英作文と普通の英作文（和文英訳）の比較については、数値を見る限り、普通の英作文の方が会話英作文よりも英語力の向上に役立つという意見を学生が強くもっているわけではないことがわかる。普通の英作文の方が文法的なポイントがはっきりしていて勉強しやすいという意見も2.97と決して強くはない。これは、一見、会話英作文の解答を作る時に文法的なポイントがわかりづらいという意見が3.57というかなり高い数値で出ている事実と矛盾しているように思われるが、この後者の数字が意味するものは、授業での解答添削以前の問題であって、文法的な説明は授業の解答添削中に行われている範囲である程度十分だということの意味していると思われる。

会話英作文が英語力向上に役に立っているかという問に対しては、第1回アンケートでは3.71、第2回アンケートでは3.87と0.16ポイント改善された。これは授業方法の不满が多少改善されたことと、後期は学生が希望した章を中心に扱ったことが要因として考えられる。実際の割合で見ると、会話英作文が英語力向上に役立っているかという問に対して、「4どちらかといえばそう思う」または「5そう思う」と解答した学生は第1回アンケートでは63.24%、第2回アンケートでは75.36%と12.12ポイント改善されている。5段階評価では0.16ポイントの改善が、これほど大きな差を生じさせているのは第1回アンケートで「3どちらとも言えない」と回答した学生数が19名から10名に減り、「5そう思う」と回答した学生が11名から18名に、「4どちらかといえばそう思う」と回答した学生数が32名から34名に増えたためである。

しかし、「4どちらかといえばそう思う」と回答した学生、つまり「どちらかといえば役に立っている」と消極的な肯定派が第2回アンケートでも69名中34名（49.28%）を占めていることは注意を要する点である。これは、「会話英作文は適切な授業内容だったと思いますか」という問にも関係して

いて、この間に「5 そう思う」と回答したのは19名 (27.54%)、「4 どちらかといえばそう思う」と回答したのは25名 (36.23%) で、回答者数の割合で言うと63.77% (44名) にしか当たらない。また「3 どちらとも言えない」と回答した学生が18名 (26.09%) おり、会話英作文はある程度学生に受け入れられたとは言え、広く学生に受け入れられたとは言い難いというのが、アンケート結果から言えることである。しかし、応用問題の提示の仕方をより、それぞれの学生の自分の問題、身近な問題として捉えられるように変えることにより、この数字はもっと改善できるという感触を筆者はもっている。

#### 4. 英語試験の結果から見た会話英作文の授業内容としての妥当性

学生の感覚としては、授業が学生の英語力向上に多少貢献しているように感じられているようであるが、実際の英語試験の得点には授業の学習効果はどのように現れるのだろうか。つまり資格試験での得点力という意味での英語力はどのように変化したのであろうか。英語試験の結果を以下に示す。

試験問題の内容	第1回英語試験の平均点	第2回英語試験の平均点
文法、語法、語彙、イディオムの問題 (1点×25問)	13.48点	13.09点
整序作文 (1点×5問)	2.79点	3.00点
対話文を完成させる問題 (1点×5問)	2.41点	2.49点
総合平均 (35点満点)	18.68点	18.58点

一年間 (実質約8か月弱) にわたる授業の結果、総合平均点は僅かながらも下がっている。100点満点に換算すると、第1回英語試験の平均点は53.37点、第2回英語試験は53.09点。この差が意味するものは実は数字が与える印象よりも大きい。なぜならば、試験受験者数が第1回英語試験は73名、第2回英語試験は69名になっており、減った4名は、前期の期末試験結果が極端に悪かったことから、この年度の単位取得を諦めて授業放棄したものと推察されるからである。最下層の学生が抜けたにも拘らず、平均点は下がったのである。学生の感覚としての英語力向上は、必ずしも資格試験での得点力

[事例調査報告] 会話英作文の授業内容としての妥当性と学生の受容度について

の向上にはつながらなかったのである。

第1回英語試験と第2回英語試験では受験者数が異なっているので、単純に比較しても仕方がないが、得点別の学生の分布を以下のようにまとめてみた。1点刻みでまとめても、分布がはっきりわからないので5点ずつで得点領域を設定してまとめた。

第1回英語試験該当者数	0	3	16	18	25	11	最低点5点
点数領域	0~4点	5~9点	10~14点	15~19点	20~24点	25~28点	最高点は両試験とも28点
第2回英語試験該当者数	0	3	14	24	19	9	最低点8点

最低点は、第1回英語試験の5点から第2回英語試験では8点になっているが、学生が最も多く分布する得点領域が第1回英語試験では20~24点だったのに、第2回英語試験では15~19点に下がっている。

学生の感覚として、授業がある程度英語力向上に役立ったという感覚と試験の点数に見る英語力の低下の因果関係を解明するのは非常に難しいことである。しかし、若干の学生が自由記述欄に書いてくれたコメントと学生の英語学習環境からある程度の推測はできそうである。授業で扱ったテキストの章は既に紹介した通り、前期は日常の生活の中のやりとりを学ぶ章、後期は道案内や海外旅行という特定の目的のための表現を学ぶ章であった。授業が役に立ったと第2回アンケートで回答してくれた学生の一人が「高校では学ばなかった実用的な表現を学ぶことができた」とコメントしてくれた。学生にとっては受験勉強で学ぶ英語表現とは異なった、生活に密着した表現、海外旅行などの具体的な場面で必要とされる表現を学ぶ機会に、授業がなっていたことが窺い知れる。しかしながら、東洋大学では英語の授業は1回90分とは言え、1週間に英語 I A (筆者が担当したクラス) と英語 I B (読解) の2コマしかない。高校のように、1回50分でも1週間に6コマ、7コマ、8コマも授業があるわけではないのである。英語に触れる時間の減少、不足が英語試験の平均点低下に関連していることは間違いなく言えるだろう。実際、英語試験の結果は、この推察を裏付けるようなものになっている。問題1の広範な文法、語法、語彙、イディオムに関する問題(25題)では平均点

は下がっているが、問題2の整序作文（to不定詞の使い方、S + Vの語順、前置詞句の使い方、関係代名詞、比較の5題で、いずれの項目も授業内で体系的な復習をした）、問題3の対話文完成では平均点は僅かであるが上がっている（この程度の点数の変化は誤差の範囲内と考えることもできるが、少なくとも下がってはいない）。授業の中では、資格試験の解答テクニックのようなものには一切言及していないから、学生は授業のための予習（指名された時にすぐに解答を板書できないと減点の対象になる）、復習（復習小テストのため）だけは最低限やった。その結果、授業で触れられた項目については記憶に残っていても、それ以外のものは忘れられ始めているということであろう。

実際の英語試験で、明確な学習効果が点数に現れなかったもう1つの要因は、使用したテキストの難易度に問題があったことも考えられる。テキストの難易度についてもアンケートで尋ねてみた。

質問事項	第1回アンケート	第2回アンケート
使用しているテキストは難しすぎますか。	2.35	2.70

前期の2.35という数字は、テキストの難易度が学生の英語力にあっていないことを示していると解釈してよいであろう。後期になって、2.70に改善されたのは、特に海外旅行の章での出入国手続き、ホテルでのチェックインやトラブルに対応するための表現、道案内や交通機関の乗り継ぎなどを説明するための表現が、学生には少し難しかったからのようである。実際、後期になってテキストが難しくなったと一部の学生が頻繁に言っていた。それでも数字は2.70で、全体のことを考えれば、もう少し難しめのテキストを使用してもよかった、もしくは、どの章を扱うかを最初から学生に尋ねておくべきであったというのは授業担当者の反省点である。

全体のことを考えれば、という点を強調したのは、実際にはこれ以上難しいテキストを使用することが困難な状況にあるからだ。既に言及したように、前期期末試験の結果が極端に悪いために授業放棄したと思われる学生が4名いる。アンケートでも、使用しているテキストが難しすぎると思うと答えた



[事例調査報告] 会話英作文の授業内容としての妥当性と学生の受容度について

学生が、第1回アンケートで「5 そう思う」が2名、「4 どちらかといえば そう思う」が6名、第2回アンケートでは「5 そう思う」が3名、「4 どちらかといえば そう思う」が14名いる。東洋大学では、英語のクラス編成のためのプレイスメント・テストは行っていない。推薦試験で入学する学生もいれば、英語を合格判定科目としない受験パターンで入試を受験する学生もいる。その上、再履修者用のクラスは設置されていない。再履修者は各クラス10～15%程度の人数を占める。これに正規の学年の、英語が苦手な学生がさらに加わることを考えれば、\*4 使用するテキストの難易度を上げることは容易にできることではない。

このような現状を考えれば、学生の資格試験での得点力の向上という意味での英語力を、数字上で明確にわかる形で向上させることはできなかったが、ある程度、英語力の維持ができたという意味では、今回の会話英作文の授業は授業内容として、必ずしも不的確であるとか意味がないとは言えないと思われる。この授業内容・形態でより良い結果を残すには、既に示した反省点に加えて、授業の準備以外の英語学習の機会を作る手段を講じる必要がある。例えば、資格試験の問題を抜粋して課題として課し、その解答解説を通じて可能な限り広範な文法・語法に触れてもらう機会を作る、学生の求める内容(章)をもっと数多く取り上げる、もしくは、短時間で扱うことのできる副教材等を使用するということも広範な文法・語法に触れてもらう機会作りに役立つであろう。そうすることによって、問題点の解決につながると思われる。

## 5. 会話英作文に代わる授業内容としてのエッセイ・ライティング

実は、第1回アンケートの中で、会話英作文と比較する授業内容として、エッセイ・ライティングを取り上げ、学生に質問をしてみた。第1回アンケートでは会話英作文に代わる授業内容としてというよりも比較する授業内容として取り上げたただけであった。エッセイ・ライティングは、その教育効果、必要性の点で、近年英語教育に携わる者の中で注目されてきたものであるからだ。ここ数年間の大学英語教育学会全国大会では、エッセイ・ライティング、パラグラフ・ライティング、自分史などについての研究発表、実

実践報告、シンポジウムのいずれかが必ずある。日本で暮らす日本人大学生にとっても、スピーキング、リスニング能力を向上させることは当然大切であるが、インターネットやEメールの普及により、英文を「書く力」も大切であるという感覚が学生の間を広まりつつあるのも事実のようである。そのような現実を踏まえて、アンケートでエッセイ・ライティングを取り上げ、質問してみた次第である。

質問事項	第1回アンケート	第2回アンケート
現在の皆さんの英語力でエッセイ・ライティングの練習は可能ですか。	1.97	-----
和文英訳(会話英作文も含めて)よりもエッセイ・ライティングの方が英語力向上に役立つと思いますか。	3.32	-----

アンケートからは、エッセイ・ライティングについて、「関心はあるが自信はない」という現状が見える。「和文英訳よりもエッセイ・ライティングの方が英語力向上に役に立つと思いますか」という問いに対しては、「5 と思う」が9名、「4 どちらかといえばと思う」が20名で、あわせて29名(42.03%)が肯定的な考えを示している。

この事実を受けて第2回アンケートでは、もっと積極的に会話英作文に代わる授業内容となり得るかということを探るためにより詳細な質問を試みた。「前回のアンケートで比較的肯定意見が多かったエッセイ・ライティングの授業を行うのに、次の各項目(語彙、品詞、基本5文型、句と節、文法、語法・イディオム等)について、あなたは知識があると思いますか」と質問を設けて、以下の6項目について尋ね、さらに関連する2つの質問をした。

[事例調査報告] 会話英作文の授業内容としての妥当性と学生の受容度について

質問事項	第1回アンケート	第2回アンケート
エッセイ・ライティングの授業をするのに、あなたは各項目について知識があると思いますか。		
1. 語彙について	----	1.71
2. 品詞について	----	2.04
3. 基本5文型について	----	2.36
4. 句と節について	----	2.22
5. 文法について	----	2.19
6. 語法・イディオム等について	----	2.07
クラス・サイズを考えた場合、上記6項目を1年次に学習し、2年次にエッセイ・ライティングを行う授業は適切だと思いますか。	----	3.29
英語の文章構成、及びパラグラフ構成について関心がありますか。	----	2.96

これらの質問に加えて、一部の学生の興味が会話英作文よりもエッセイ・ライティングに傾いていることが、既に第1回アンケートで明らかになっているので、エッセイ・ライティング中心の授業とスピーキング（リスニングを含む）中心の授業の比較で学生に質問してみた。引き続き第2回アンケートの結果を示す。

質問事項	エッセイ・ライティング	どちらとも言えない	スピーキング
クラスサイズを考えた場合、エッセイ・ライティングとスピーキング（リスニングを含む）の、どちらを英語IAの授業内容として希望しますか。	37名 53.62%	16名 23.19%	16名 23.19%
クラスサイズを考えなければ、エッセイ・ライティングとスピーキング（リスニングを含む）の、どちらを英語IAの授業内容として希望しますか。	21名 34.78%	22名 31.89%	26名 37.68%

ここで、再度目をひくのは、学生の側にスピーキング中心の授業を望む声が意外に少ないことである。そして、東洋大学文学部の英語の授業環境を考慮すると、エッセイ・ライティングを希望する声が半数を超えていることも注目に値する。これは「自分の意思、意見を表現する能力は身につけたいが、他の学生の前で間違いを訂正されたりするのは嫌である、あくまでも対教師との関係において、その能力を向上させたい」という思いを反映していると

言えよう。実際のところ、エッセイ・ライティングは自分の意思、意見を表現するための語彙、構文を習得するには、予め英文に訳す内容が決められている会話英作文よりも学生個々の満足度を向上させるには良いであろう。その意味では、英語コミュニケーション能力の向上という観点から見ても、エッセイ・ライティングの方が会話英作文よりも授業内容としては適切といえるかもしれない。

しかし、今回、会話英作文に代わる授業内容としてエッセイ・ライティングを挙げたが、実際には、このクラス・サイズで学生が本当に満足するようなエッセイ・ライティングの授業を行うのはかなり難しいと思われる。なぜならば、エッセイと呼べるだけの長さの、学生が書いた英語の文章を添削するのにどれだけの時間がかかるか、という問題があるからだ。1回の授業の中で、学生が書いた文章を2～3つ、例として印刷、配布し、それを添削指導したところで、残りの65名以上の学生の文章の添削指導はどうするのか。到底1週間では、全ての英文の添削は終わらないであろう。1つのテーマを与えてエッセイを書く作業は授業外でやってもらうとして、そのテーマについての文章の添削を2週にわたって行うのか。担当教員が添削する前に学生どうして事前添削させるのも1つの方法かもしれないが、アンケートの「教師が説明して、学生がそれをノートに取る授業形式が楽で良いと思いますか」という質問に3.41、3.30という数値の出る回答をする学生がどこまで真剣に他の学生が書いた英文の添削をするか、また英語試験が示す程度の英語力しかなく、アンケートで「エッセイ・ライティングの練習をすることが可能ですか」という問に1.97、「エッセイ・ライティングをするための知識があると思いますか」という問には、どの項目も2.4にも届かない回答をする学生の事前添削にどの程度の信頼が置けるかも疑問である。学生の事前添削には期待できそうにない。それに、「クラスメイトの前（中）で、一人で英文を読まされたり、英語の質問に答えるのが恥ずかしいと思いますか」という問に3.67、3.59、「英語を話すまたは英語で答えることを求められた時、間違いを指摘されるのが怖いと感じますか」という問に3.43、3.39と回答する学生が、自分の書いたエッセイを他の学生による添削のために進んで差し出すであろうか。学生による事前添削はシステムとしてもうまく機能するか疑問である。確かに、エッセイのテーマとともに、使用すべき構文（または表現）

## [事例調査報告] 会話英作文の授業内容としての妥当性と学生の受容度について

を指定して、必ずその構文（または表現）を使った文を入れなさい、という条件をつけるというのも1つの方法かも知れないが、それでも学生が書くエッセイに出て来る構文、表現、文法項目は予想できないし、書かれたエッセイに含まれる、どの構文、表現、文法項目を授業で特に取り上げるかの選定も容易ではない。当然、匿名だとしても、例として取り上げられ、授業で添削指導をされるエッセイを書いた学生の気持ちも複雑であろう。クラス・サイズがこの規模（40名以上）になると、学生どうしが小さなグループを形成し、このグループ間の交流はかなり稀薄である。最近では、クラス全体が1つのコミュニティになるのは、かなり難しいようである。

そのような現実を考慮すると、授業の進め方、課題の出し方などに工夫をした上で、会話英作文を授業内容とする方が40名以上の履修者のいるクラスにおいては現実的な対応ではないかというのが筆者の見解である。

## 註

1. この英語力試験には実用英語検定試験準2級模擬試験の問題を使用した。授業が「英語 I A」という読解以外の内容を扱う授業だったため、学生に解答させたのは、問題1（文法、語法、語彙、イディオムに関する問題）、問題2（整序作文）、問題3（対話文を完成させる問題）のみ。

また、今後この試験については、前期第1回目の授業で行った試験を第1回英語試験、後期最終回に行った試験を第2回英語試験と呼ぶ。事実上、前者はPre-test、後者はPost-testである。なお、前者実施後、答案返戻、解答配布、解説は行っていないし、両者の実施時期には、約9か月の間があいているため、所謂practice effectはないと考えて良いと判断される。

2. 今後、後期第1回目の授業で行ったアンケートを第1回アンケート、後期最終回の授業で行ったアンケートを第2回アンケートと呼ぶ。

3. テキストの各章の最後にある口頭練習の問題。

4. 第1回英語試験で35点満点中15点未満（100点満点換算で40点以下）の得点であった学生は73名中19名（受講者の26.03%）を占める。